俺様系の同僚が実はM気質バリネコなので、彼を満足させるために亀頭でも責めていじめてやろうと思います

体験版

クール系サバサバリーマン×俺様だけど本当はM気質リーマン

受け：鬼柳（きりゅう）
攻め：酒々井（しすい）
要素：目隠し、イキ我慢、亀頭責め、前立腺責め、潮吹き

『明日暇？』

仕事中、プライベート用のスマホが震えたので確認してみると、短い質問が送られてきていた。このメッセージを送っているのは、おそらく現在喫煙室にいる男からだ。どうせ10分後には顔を合わせるんだから、明日暇かどうかくらい直接聞

けば良いと思うが、俺たちの場合は会う場所とすることの関係で、あまり人前では言いにくい。
だとしても、急だ。明日のことを今日聞くなと思う。しかしながら、俺は明日暇だ。だからこのやり取りにおいて乗り気な言葉を返したら、きっといつものホテルに何時集合と送られてくるんだろう。
そうと分かって律儀に、昼からならと言ってしまう自分もどうかと思うが。

実際あの後手際よく段取りを決めた俺たちは、土曜の昼13時にホテル集合になった。約束の時間の少し前にホテルに到着すると、ロビーには既にほどよく綺麗な格好をした同僚が腰を下ろしていた。彼を見つけたので近づくと、俺に気づいた向こうも手を振って俺を呼ぶ。

「おう酒々井、待ってたぜ」
「別に集合時間には遅れてないけどな」
「楽しみで早く着いたんだよ」

ふふんと楽し気に笑い、俺の到着後はさっさとフロントに行く鬼柳は、一緒の職場で働く同僚だ。13時まではまだ少し早いが、ホテルのスタッフを少々急かして中に入ることにしたらしい。この我が道を行くタイプの男は、まさしく常に俺様何様鬼柳様状態なのだが、彼には俺しか知らない秘密がある。

「で？今日は何していじめてくれんの？」

部屋につくなり交互にシャワーを浴びると、さっそく鬼柳からふっかけてきた。腰にタオル一枚だけを巻いてごろりとベッドに横になる彼は、表の顔は俺様のくせに、裏では性的にいじめられるのが大好きな変態だ。しかもゲイ。それをなぜ俺が知ってしまったかと言うと、会社の飲み会で泥酔したコイツを家まで送っていった日に、うっかり流れでしてしまったから。
お互いのゲイバレがこんなタイミングになるとはと俺は頭を抱えたが、意外にも鬼柳はそこまで気にしていないようだった。なのでそれ以後、高頻度にセックスをする仲になっている。
ただし、問題なのはセックスの内容だ。俺は別に、相手をいじめる趣味はない。だがコイツを抱くとなると必須の条件なので、どうしてもため息が出てしまう。

「どうせいじめられる前提なら、最初からしてほしいことをリクエストしてくれると助かるんだが」
「なんか自分から言うと萎えるだろ、そういうのは」
「知らん、それは」
「どうする？一旦目隠しでもしとく？備え付けあんぜ、ほら」

そしていじめることに積極的姿勢を見せない俺とは反対に、鬼柳は常にあけすけだ。今もホテルの備品でベッドボードに置いてある、個包装になったアイマスクを見せてくる。そんなものをワクワクしながら俺に見せてくるなと思うが、これは彼なりのアピールだ。つまり、今日は目隠しプレイをしてみたいと暗に言って

いる。なので早々に彼の手からかっさらって、ビニールの個包装を破いた。それから中身だけを取り出して、彼に返却する。

「つけるなら自分でつけろ」
「なんだよ、お前も気になってたのかよ」
「いらないなら捨てる」
「いや、捨てんなよ！つけるから待っとけって」

俺が淡々と話を進めると、今度は鬼柳の方が俺からアイマスクを奪い取っていった。なんの変哲も無いそれをつけた鬼柳は若干間抜けに感じるし、そもそも作りが安っぽいので、本当に見えなくなっているのかもあやしい。

「それ、本当に見えなくなったのか」
「割と。光は若干感じるくらい」

一応視界を覆えている分、見えづらくはなっているらしい。ならば光も調節してみるかと、手元の調光のつまみを回して、徐々に部屋を部屋の照明を落としてみた。俺からすると常夜灯くらいの暗さだが、鬼柳は本格的に何も見えなくなったのか、不安げにあたりを見渡していた。なのであえて声をかけずに、こっそりと彼の背後に回り込む。

「意外と悪くないかもな、目隠しも」
「っ、ん…！」

肌が擦れたことで俺の気配を感じた鬼柳は、びく、と軽く肩を揺らしていた。そのまま前に回した腕でわき腹から腕にかけてを撫でてやると、ひくひくと喉を震わせる。ちなみにタオルの中心は既に山になっていて、彼が準備万端であることを物語っている。
何かを期待するように鬼柳が振り返ったので、そのまま唇を奪った。見えないので突然の事だというのに、しっかりと俺に合わせて舌を絡めてくるのがいやらしい。セフレとのキスにも熱心な奴だと思う。
身体をまさぐりながらのキスが終わると、鬼柳の息が上がっていた。風呂上がりとは無関係に汗ばむ肌を緩く撫でれば、それだけで熱い息を吐いている。だがコイツが興奮するのは、やはり自らがいじめられる時だ。なので先に、今日することの説明だけはしておく。

「...今日は」
「ん...？うん？」
「俺がいいって言うまで、イクのを我慢するってのはどうだ」
「イクのを我慢？縛んのか？」
「いや、別に縛らない」
「どういうことだ？俺に自分で我慢しろって言ってんのか？」
「そうだ」

俺が生粋のSならよかったのだが、あいにくそうではないので、俺には鬼柳がしてほしいことが良く分からないことが多い。だから基本的には、今日する予定の

ことを鬼柳に聞いてみてから行うのがほとんどだ。鬼柳曰く、そんな律儀に確認を取らなくていいとのことなのだが、分からないと俺が不安なので必ず聞いてしまう。
ちなみに今日のプレイ内容に関しては、それいいな、という反応は返ってこなかった。むしろ鬼柳は、う〜んと首をひねっている。だが少し考えた後、鬼柳はにぃ、と笑って俺を見た。

「言ってる意味はあんまり分かんねぇけど、良いかどうかは酒々井次第か。良くしてくれんなら俺はそれでいい」
「良いかどうかは保証しない」
「しろよ、そこは」
「努力はする」

ただし反応はいまひとつであっても、鬼柳からのざっくりとした了承が得られた。これで今日の方向性は決まったので、あとはもうおなじみの流れだ。なので本格的に始める合図のキスをしてから、次は乳首に触れていく。

「ふぁ、あっ」
「なんだ、今日は随分素直に声が出るな」
「ち、が、いきなり、来るからっ」
「見えない分いいのか？」
「んひぅ…ッ！」

最初のうちは控えめな鬼柳にしては、乳首を責めただけでも珍しく声を出していた。どうやら俺の手が見えないせいで、どこに刺激が与えられるか予想できない分、声が出てしまうようだ。それが面白かったので、しれっと耳に舌を這わせてみると、鬼柳は軽く背をしならせて感じていた。普段よりも感じやすい身体に、俺も興奮する。
片方の手は乳首に当てたまま、利き手を下半身に移動させて、腰に巻かれたタオルをはだける。鬼柳の中心部分はそそり立っていて、淡い照明が当たってぬらぬらと光っていた。

「もう濡らしてるのか」
「っ、だって…！」
「変態」
「んんン…！」

ぬりぬりと2本の指で濡れる先端部分を撫でてやると、奴は媚びを売るように腰を動かした。そのまま俺の手を握って、もっとしっかり握るように促してくる。

「ぁ、も、っと、もっと」

早く扱けと急かす彼は、もはや自分で俺の手を握りながらオナニーをしているようなものだった。それを咎めても良かったが、取り立てて怒るほどのことでもないので、俺も鬼柳の熱を握って自分で手を動かす。素早く扱いてやれば、それだけで彼はイキそうに腰を揺らし始めた。

だが、今日は俺が良いというまで奴がイク権利はない。なので手を止めないまま、最初に言ったことを思い出させる。

「はぁ、あ、ッ、イク、イク、もう出るっ！」
「我慢しろ」
「ッ、あ゛、無理、無理っ！！」
「まだだ、まだ我慢」
「〜〜〜っ！！？」

言葉の意味を分かったようで理解していなかった鬼柳は、ここに来てようやく俺の言ったことを噛み砕いたらしい。だが分かったところで、苦しさは変わらない。本当は解放したいと願う身体を、自らの意思で止め続けるのだから。しかも物理的な制約が無い分、気持ちで抑え込むのは相当な精神力がいる。
実際、手を緩めずに扱き続ければ、さほど時間もかけずに鬼柳は足をガクつかせ始めた。それから、今度は俺の手を止めるために上から握ってくる。

「んんっ、ぎ、ッ、し、酒々井、も、無理、無理ぃいい...っっ！！」
「耐えろ耐えろ、まだ我慢だぞ、我慢我慢...」
「んんんぅうん゛っ！！ひぐ、ぅ、ぅ、っ、あ゛ッッ！！」

そして痙攣は、徐々に足だけでなく腰、腹、胸まで広がっていった。どうにか俺の手を止めようと、必死に腕に縋りつく姿はかわいらしい。だが俺が止めないせいで、鬼柳は千切れんばかりに首を振っていた。

「ぃあぁああっっ！！もぉキツいっ！！や、ぁ、あ゛っ、イクっ、も、出るっっ…！！」
「ダメだろ？そんな簡単に約束を破ったら」
「ッ、く、ぁあ゛…っ！！」

そんな彼をもっと追い詰めるために、先走りを絡めてぬめった指で、乳首をくにりとつまんだ。すると、ガクっとひと際大きく身体が反り返る。あぁ、これはこのまま続けたらイッてしまうなと思った俺は、彼の我慢が崩壊する前に、自ら手を離して快感から遠ざけた。

「っ、は、あ゛…！！？」

いきなり自分の熱から手が離れたことに、鬼柳は驚いているようだった。おそらく俺の読み通り、我慢できずにイッてしまう寸前だったのだろう。だから俺が刺激を与えなくとも、彼の身体はまだ震えていた。
座ったままだと体勢が苦しいかと思ったので、俺は鬼柳の身体をベッドに寝かせた。それでもまだ、彼はひくり、ひくりと身体を跳ねさせていたので、よっぽどイキ我慢は堪えたらしい。

「や、ヤバい…っ！きついって、これ…！」
「何言ってる。きつい方がいいんだろ？」
「っ、ま、待て！俺まだっ」

「次はもっと苦しくなるかもな？」
「ぅあうっ！！？」

だがむしろ、苦しいことは彼にとってのご褒美でもある。だからきついだの何だのと文句は飛んでくるが、絶対に止めろとは言われていない。いや、むしろ言ってきたとしても、止めないほうが喜ぶのだが。
仰向けに寝転ぶ鬼柳の体の足を広げて、そそり立つ中心にたっぷりとローションをかけた。そして滑る彼の自身を握って、再び手を上下に動かしてやる。

「ひっ、ぁああっ！！んんっ、っく、あ、あ、やめろ、無理、これマジで無理だっ！！」

イクのを我慢して敏感になった場所に、先ほどよりも感じやすい工夫を施された鬼柳は、慌てて足を閉じて抵抗してきた。よっぽど気持ちいいのには違いないのだろうが、これだと俺がやりにくい。なので片方の足を押し返してみたが、意外と力が強くて負けてしまいそうだ。なのでこういう時は、プレイの一環として奴に制約を課すのがいい。

「足を閉じるな。どうしても閉じてしまうなら、動かないように自分で持て」
「っ…！？」
「ぼさっとするな、早く」

アイマスク越しの目は、きっと俺のことを泣きそうな目で見ているんだろう。そりゃあそうだ。俺だって自分を自分で追い詰めるようなことを強要されたら泣きたくもなる。だが、コイツはそれが好きなんだ。だから一瞬ためらってはいたが、そろりと両手をそれぞれの膝の下に通して、パカリと自分で足を広げる。

「そうだ、そのまま閉じるな」
「んぅううう…ッッ！！」

言うことを聞けた鬼柳を褒めるように、ローションで濡れた手で太ももを撫でた。それだけでガクンと身体を跳ねさせる奴が、どれほど限界かなんて見ていれば分かる。だが手加減はしない。
丸見えになった後ろの孔を、つい、ついと親指で撫でたり、カリカリと爪で淡く引っかきながら、反対の手で濡れそぼった熱も扱く。絶頂寸前の状態で快感を与え続けられるせいで、抱えた足は当然のように痙攣していたし、鬼柳の口からは苦しそうな喘ぎ声が漏れていた。それでも気にせずにゅりにゅりと亀頭を手のひらで包んで撫でてやれば、ガクンと背中を反らして、下の口も開閉させて悶え始める。

「あふ、ぅううぅ゛ッッ！！っ、は、ぁ、も、出さ、せて、いきた、い゛っ、も、もぉっ…！」
「ダメだ。俺が許可してない」
「無理ッ！出る、出るからっ、我慢、できなっ」
「出すなと言ってる」

「うう゛ぁっ！！あはぅっ！っぎ、っん、んん！！」

本人的にも、既に耐えれる限界点にはたどり着いているんだろう。それでも俺の言葉を守ろうと我慢できているのは、むしろ素晴らしいことだった。ただし褒めてはやらないし、俺ももっと鬼柳を追い込むことは可能だ。
なので入り口だけを愛撫していた指を、彼の孔の中に入れていく。ぬぶりとローションの滑りを纏う指が中に入ると、きゅううぅと彼の内部が吸い付いてきた。けれども軽く動かしてやっただけなのに、なんとそれまでどうにか耐えていたはずの熱から、びゅっと白い液体が飛び出してきたじゃないか。これには俺も驚いてしまったが、声には出さずに淡々と鬼柳を責めることにする。

「んふぁっ！？あ、あぅ…ッ！？」
「おい、誰がイッていいって言った」
「ッ、だ、って」
「この程度も耐えられないか。だらしない奴だな」
「あぅううぅうっっ！！？？」

一応我慢しようとは思っていたのか、射精してしまったのは鬼柳としても予想外だったらしい。なので見えないまま、濡れた腹のあたりに視線を送っていた。だがもちろん彼には見えていない。俺がイッたばかりのアイツの自身を、まだまだいじめるつもりで笑っていることなんて。
まだ全てを出し切っていないようだったので、裏筋なぞってやったら、とろとろと精液が溢れてきた。くぅん、と犬の鳴くような声を出して首を振るコイツが、

いつもとは違ってひどく小さく見える。だが忠犬よろしく、足は自分で抱えたままなのがいやらしい。

「なんでまだイッてる？止められないのか、これは」
「ぃあ、あ、む、り、無理...ッ！」
「もうきつく扱いてもないのにな？少し触るだけのことも耐えられないか」
「はふぅうう...っ！！」

言葉でもいじめてやると、じゅわりと先端から残りの精液が溢れてくる。はぁはぁと熱い息を吐きながら、恥ずかしそうにそっぽを向く仕草がたまらない。あの鬼柳を好きにしているんだという征服欲が満たされて、俺も興奮してくる。彼の熱を緩めに触りながら、俺は中の指も動かした。今度は前立腺を狙って指を進めていく。もう何度もしているおかげで大体の場所は分かっているので、今日も難なく彼の弱点は発見できた。コリコリとした触感を楽しむように指先で押し込めば、ぐんと鬼柳の喉が反る。

「んんんっ！！ッあ、そこ、そこぉ...！」
「相変わらず好きだな、ここ」
「ぁ、は、はっ、んぅう...っ！」

ひく、ひく、と腹を波打たせながら、うっとりと息を吐く彼を見ていると、そんなに尻で感じられるものかとも思う。ゲイではあるが、入れたい派の俺には分か

らない感覚だ。だが強気なコイツがこれほど感じ入ってしおらしくなる程度には、気持ちのいい性感帯なんだろう。
だが鬼柳は、しっかり監視しておかないとしれっと約束を破る時がある。だから俺も、準備が整ったら入れても良いなと思って指を動かしていたのだが、彼がこっそり中イキしようとしている気配を察知した。それは見逃せないなと、俺はすぐに指を抜く。

「おい、こっそりイこうとするな」
「くぅ…っ！？」

まさか俺にバレるとは思っていなかったのか、鬼柳は口を半分開いたまま俺を見上げてきた。それからきゅっと下唇を噛んで震えていたので、やはり内緒でイクつもりだったらしい。それを防げたのはよかったが、切なそうに見上げてくるはずの目が見えないのは少し残念だ。

「言っておくが、今日は中でイクのも俺の許可がいるからな」
「んなこと、言われても…！ドライでイクのは、自分でどうにもできねぇよ！」
「そんなの知るか。我慢しろ」
「め、めちゃくちゃ言う、ん、ぅうんっ！」

そろそろ自分で足を持たせているのも酷だと思ったので、彼の身体をコロンと横向きに倒した。それから俺も鬼柳の後ろに横たわって、彼の背中側から前に腕を

通す。そして彼の身体の上に来ている足を抱えて、反対の手をヒクつく孔に伸ばした。やりやすいよう体勢を整えてから、期待している場所に指を進めていく。

「く、ぁ、あ、まっ、酒々井、俺マジで、中のはっ」
「出そうが出すまいが関係ない。俺は許可なくイクなと言ったんだが？」
「っ、でも、っぁ、ぁ、ま、って、そこ、そこはっ」
「ほら、届いたぞ？あとは我慢するだけだな？」
「〜〜〜っんんん！！！」

2本入れた指の先が、ちょうど前立腺に当たった。その瞬間、分かりやすく鬼柳の足が跳ねる。嫌がるように彼は首を振って、許しを求めて俺の方を見てきたが知ったことじゃない。ぐにりと押し込んでやれば、ガクンと抱えた足が弾んだ。それでも関係なくふにふにと交互に揉んでやれば、鬼柳は俺の腕の中で身体を振ってもがきだす。

「んぅあっ！！あふ、ぅう、ッ、ヤバっ、あ、あ、それ、それダメなやつだからぁっ！」
「お前はこのやり方が心底弱いな？」
「っひ、ぃ、気持ち、ぃいぃ…っ！んぁ、ぁ、い、っっ、く、イク、イク、もぉ無理…！」
「耐えろ。耐えた分だけ気持ちよくなれるぞ？」
「ふぐ、ぅう…ッッ！！んぁ、ああぅ、ぅ、うぅぅうんっっ！！」

もしも自分が同じことを言われたら、相手が誰だろうと蹴とばすなり、引っぱたくなりして怒るだろう。だが鬼柳は、強い言葉を使われて、嬉しそうに指を締め付けていた。結局彼は、嫌だと口では言いながら、この状況を楽しんでいるということだ。
ならば責める手を緩める方が失礼なので、俺も遠慮はしない。イクから止めろと言われても、しつこく前立腺を擦りまくってやった。

「んぁ、ああっ！！ッ、も、やぇ、イク、ほんとにイクっ！！」
「そんなにいいのか？見えない中で、ここを弄られるのが。相変わらずいじめられるのに弱いな、鬼柳？」
「ッ、っっ！！！？？」

そして前立腺が揉みこまれるだけだと思い込ませたところで、ぐうっと強めに押し込んでやる。小さなしこりを指先で内側に押すと、腕の中の身体がぐんと反り返った。そのまま鬼柳は、がく、がく、と身体を痙攣させ始める。うぁ、あ、と詰まったような声で喘ぐのは、まさしく彼がドライでイクときの分かりやすい特徴だ。

「ぅ、あ、ぁぁ…ッ！ひ、ひぅう…！」
「なんだ、もうイッたのか？耐え性がないな、本当に」
「っ、あ、ん、なの…！誰でも、無理じゃ」
「出来損ないは反省もできないのか？」
「ぅあぁあ゛！？」

ただ、俺だってあれだけのことをして、鬼柳が本気で耐えられるとは思っていない。いや、出来るなら大したものだと思うのだが、同じことをされたら誰でも無理だという鬼柳の意見の方がもっともだと思う。
けれど今、正論は求めていない。俺が見たいのは、言いつけも守れずにだらしなくイッた後、もっと俺にいじめられて、泣きながら悶える男のみっともない姿だ。だからまだ絶頂の余韻の残る内部に、次は3本の指を入れていく。それから例の弱点を、それぞれの指で延々と引っかいてやった。

「はぅ、ンっ、ぅうんっっ！！？や、も、イッた！今イッたからぁっ！」
「そうみたいだな」
「ひぎっ、ッ、いい、から、今はヤバ、ぁ、ッッんん！！や、だめ、だめだっ、そんなにしたらイキ過ぎるっ！！」
「それならイカないように我慢したらいいだろ？今日は元々、そういう約束だったしな？」
「〜〜〜〜っっ！！」

ちなみに鬼柳は、いじめてほしいという性癖は持っていても、強すぎる快感には耐えられないタイプだ。だからしつこく責めるとちゃんと拒否を示してくるのだが、あまり彼の意向に寄り添ってやったことはない。だから今日も、俺の手を握って必死に首を振る鬼柳はしっかり見えているが、無視して指を動かし続ける。

ぬりぬりぬりと、執拗に指で前立腺を引っかきながら、スケベ、と耳元で囁いてやった。すると鬼柳は、ぶわりと髪を逆立たせるように震えた後、かくんと腰を浮かせて、全身を突っ張らせた。重い絶頂に入った気配を見て、彼には見えない口に笑みが浮かぶ。

「んんぁ゛…ッ！は、ぁ、あぅう゛ンン…！！」

つい、つい、と愛でるように優しく前立腺を撫でるだけでも、次の絶頂に陥るほど敏感になったのを確認してから指を引き抜く。もはや自分ではイクことを制御できなくなった鬼柳は、ビクン、ビクンとベッドの上で悶えていた。なので俺はその間に手早くゴムをつけて、しっかりと仕上げた孔に自分の熱を押し当てる。

ー続きは本編にてお楽しみくださいー